

核医学第2号発行にあたって

宮 川 正 *

近年、臨床面における R.I. 利用の普及はめざましいものがある。その範囲は血液や代謝等のダイナミクスへの利用、体内沈着を利用したシンチグラム等、非常に幅広いスペクトルをもって臨床各科に広く利用されている。しかし R.I. 利用という方法論としてはよく似た研究をしながら他の学会のメンバーとの討論する場がないという点があったが、昨年核医学会が設立され、各方面の研究が方法論として1つのまとまった場をもち、このような学会誌が発行されることは、核医学を専門とする人々にはもちろんのこと、各専門分野の R.I. 利用者にとって非常な励ましとなり、また、さらに発展させるためのよき方法と思う。

核医学は R.I. を利用するという点で臨床の各科にまたがる学問を統一したものであるが、従来、放射線という面で測定・障害など Radiology の分野で行なわれていたものがさらに発展したものであることも事実である。この点においては将来さらに発展し各専門分野において方法論として完成した暁には、あるいは発展的に解消し現在と異なった形となる可能性をもってはいるが、現在ではいまだ方法論としても十分論議する余地の多いものである。かかる面で非常にまとまりにくい要素をもつ学会を敢てまとめられた上田教授を始めとする各学会の先覚者に敬意を表するとともに、この雑誌を中心として各分野の横のつながりの学会たして今後ますます発展することを希望するだけである。

また核医学会は、アイソトープの測定という点で、いわゆるメディカル・エレクトロニクス(M.E)と非常に密接な関係があり、これをさらに発展させるためには、医師のみの能力では限界となる分

野が広く物理工学の専門家の全面的な協力が必要であり、また標記化合物の研究には化学者らの協力が必要であることはいうまでもない。とくに測定装置については十分医師の使用を考えた簡易化されたものの普及が望ましいが研究途中で実際に使用する側の意見が十分とり入れられ、目的にもっとも適した装置の開発が望ましい。この点では、従来多少問題のある点がないでもないが、今後の交流発展を望んでやまない。

最後に R.I. 利用には障害という点で、当然ではあるが非常に法的な制約をうけ、むしろ国内では一般感情が神経質であるために核医学の普及に抵抗すら感じられるし、一般的には障害が過大評価されている傾向がないでもないが R.I. そのものの知識なくてこれを研究、臨床に使用している面もないのではないとみられる。臨床検査への利用の場においても放射線障害に対して十分な説得力のある知識が必要であるとともに、研究の進歩のみではなく病院におけるこのようなセンターの普及・確立（経済的にはもちろん人的の面など）の促進をバックアップするのもこの学会の重要な仕事の1つである。

現在、医療行為ということで医師に限って R.I. 使用が比較的容易にできるようになっているが、この面で指導的立場に立つべき学会員は一応皆、障害防止対策の知識を知っている必要がある。このための基準としては、具体的には放射線取扱主任者の資格をとることが、必要ではないかと考える。

以上核医学会雑誌の続刊を祝って核医学会に対する希望をのべたが、本学会が今後とも、日本の医療に多大の貢献をすることを期待する。

* T. Miyagawa: 東京大学教授。